

みなこしまる てじまますお  
男爵船越衛伝(手島益雄稿) 昭和17年(1942)  
手島益雄文書(202107-4)

広島藩士の家に生まれた手島益雄(1873~1946)は、新聞記者を経て弁護士となり、文筆家としても活躍した。東京で東京芸備社という出版社を構え、広島の郷土月刊誌である『芸備之友』の編集を引き継ぐとともに、『浅野長政伝』(大正9年)、『広島県偉人伝』(全12編、大正14年)、『安芸備後両国偉人伝』(昭和12年、東京芸備社)、『広島県先賢伝』(昭和18年)など、広島出身の歴史的人物の伝記編さんとその出版に力を尽くした。

船越衛(1840~1913)は広島藩出身の尊攘志士で、後に広島藩年寄辻持督(維岳)の手先となり、広島藩の国事周旋活動を支えた。維新後は千葉県令、石川県・宮城県知事を歴任し、貴族院勅選議員・宮中顧問官・枢密顧問官にも任じられ、明治29年(1896)に男爵に叙された。

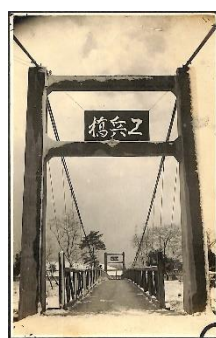
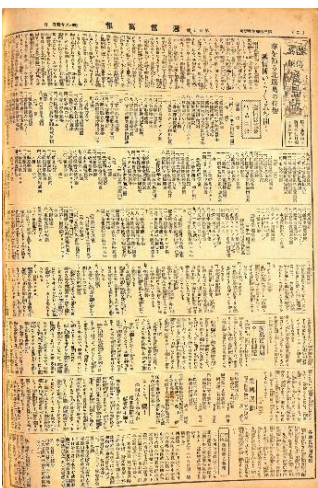


ていしんまんぼう  
通信萬報 第107号(上)と第149号(下)  
昭和8年(1933)4月1日・昭和9年(1934)7月1日

沼田良平氏所蔵資料(202109-1-87, 16)

被爆証言者として活動し、2011年に死去された沼田鈴子氏の父、沼田秀玉氏は昭和4年(1929)に広島市段原町(広島市南区)で、毎月1~3回発行するタブロイド版の業界紙である『通信萬報』を創刊した。盛時には発行部数が3万部を数え、樺太、台湾、朝鮮、満州まで及んだという。しかし、国家総動員法に基づく報道統制により昭和17年(1942)に廃刊を余儀なくされた。

『通信萬報』には、通信業(電信・電話・放送・郵便など)界の話題を中心に、広島の地域経済や、街の話題などの記事が掲載された。昭和8年(1933)3月に東白島町に完成した広島通信局の「新庁舎落成記念号」(上、同年4月1日、第107号)には、4月9日と10日に同庁舎内で「通信事業博覧会」が開催され、郵便・電報・電話各事業の利用方法や、名勝のスタンプが捺された絵葉書、昭和7年(1932)のロサンゼルス・オリンピックの映画、最新式の受信機や泥棒警報器などが出品されると報じている。また、第149号(右、昭和9年7月1日)の巻頭では、広島市に飛行場設置の必要性が叫ばれて長い、広島市民が消極的なため実現が遅れ、ようやく今回航空局長が来広して具体化するに至ったと報じている。



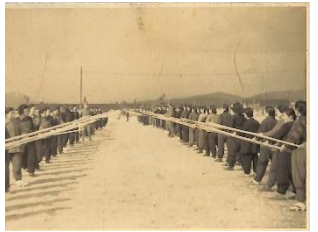
雪の工兵橋



太田川中洲での爆薬の威力実験



東練兵場での国防婦人隊による竹やり訓練



いなみ あきぞう  
以南穂三氏が所有した戦時中の広島の写真 以南家文書(202209-24~29, 43-44)

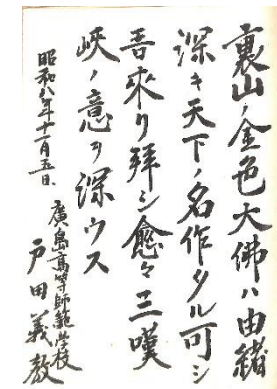
広島生まれの以南穂三氏(1916~2011)は昭和10年(1935)に第五師団に入営し、白鳥町北端にある工兵隊に配属された。満潮になると小さくなるため「満小島」と呼ばれた中洲が近くにあり、そこで爆薬の威力実験が行われたという。

穂三氏は昭和12年に起きた盧溝橋事件頃から、日中戦争の中国戦線に従軍し、昭和16年に帰国した。太平洋戦争が始まると、再度召集され広島市の船舶司令部(曉部隊)に配属され、原爆被害調査にも従事し、終戦を迎えた。穂三氏が遺した写真アルバムには、中国戦線で撮影した戦友の写真のほか、東練兵場で行われた国防婦人隊による竹やり訓練の写真など、戦時中の広島生活を映した貴重な写真類もあった。

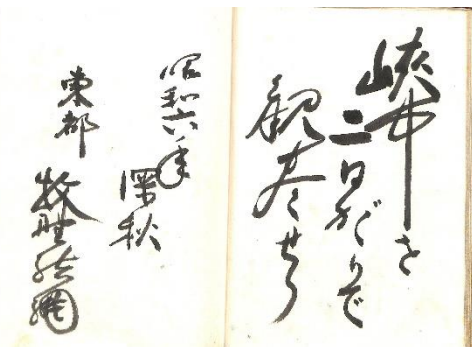


\*\*\*の とみ たろ う  
牧野富太郎のサイン 昭和6年(1931)  
後藤家文書「一語集」(202208-12)

三段峡の植生は極めて多様で、約800種類の植物が生息するといわれる。令和5年(2023)4月から放送が始まるNHK朝の連続テレビ小説「らんまん」の主人公のモデルで、「日本の植物学の父」と称される牧野富太郎(1862~1957、号は経綸)は、三段峡や八幡高原を昭和5年(1930)から12年にかけて4度訪れ、植物採取を行っている。峡北館の芳名録にはそのサインが4度登場する。初めて宿泊した昭和6年秋には「峡中を二日がかりで観尽せり」と書き残し、2日かかりで三段峡の自然観察をしたことがわかる。



<参考展示>  
広島大仏の絵葉書 戦後  
(長船友則氏収集文書  
200407-1584-4)



三段峡と広島大仏 昭和8年(1933)11月  
後藤家文書「落葉集」(202208-17)

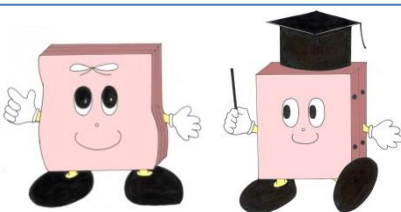
令和4年(2022)9月、「広島大仏」が奈良県から里帰りし、昭和25年(1950)に広島市本通り商店街で行われたその遷座式が、72年ぶりに本通りで再現されたというニュースが流れた。

建仁元年(1201)に出羽国新庄(山形県新庄市)で制作され、前身に金箔を張ったこの木製阿彌陀如来坐像は、観光客が多く訪れるようになった三段峡の守り本尊にしようと、三段峡を世に出した熊南楠と峡北館主の後藤吉妻らが尽力して購入し、大正15年(1926)に苦労して運んできたものであった。三段峡三ツ滝上流で安置する予定であったが、実現しないまま峡北館の裏山で安置された。

昭和8年(1933)11月に峡北館を訪れた広島市高等師範学校戸田義教は、芳名録に「裏山ノ金色大仏ハ由緒深キ天下ノ名作タル可シ、吾来リ拝シ愈々三嘆(ママ)峡ノ意ヲ深ウス」と記した。この大仏は戦後、原爆や戦死者・戦争犠牲者を弔う「広島供養塔」の本尊にと望まれ、「広島大仏」と命名されて原爆ドーム横の西蓮寺に安置され、その絵葉書まで出された。その後行方不明となっていたが、平成23年(2011)に奈良県の極楽寺に安置されていることがわかり、昨年一時的な「里帰り」を果たした。



大仏のスタンプ印  
(後藤家文書「三段峡探勝  
雲煙録」昭和8年(1933)  
202208-19)



広島県立文書館のマスコット モンちゃん(左)とジョーくん(右)

三段峡の北側にあった峡北館の芳名録  
大正13~昭和31年(1924~1956)  
後藤家文書(202208-1~34)

大正6年(1917)、写真家の熊南峰と小学校教師の齋藤露翠によって「発見」された山県郡の三段峡へは、国の名勝に指定された大正14年(1925)ごろから、その溪谷美と豊かな自然が織りなす景観の噂を聞きつけて、県内外から観光や研究を目的として多くの人々が訪れるようになった。峡北館は、八幡村の有力者の一人、後藤吉妻により同村榎床で営まれたかやぶき屋根が特徴の木造平屋の宿屋で、10以上の部屋があったという。

その芳名録には、木村位里・原玉希望・吉田初三郎等の画家、大河内伝次郎・阪東妻三郎・伏見直江等の俳優、河東碧梧桐等の俳人などの有名人から、無名の一般の人々までが、自分の住所や名前などとともに、三段峡を廻った感想や想い出などを書き残した。

令和4年度 第3回収蔵文書の紹介展

# 新たに収集した文書から Ⅲ

開催期間：令和5年1月24日(火)~3月4日(土)

広島県立文書館では、広島県に関する行政文書や古文書、その他の記録を収集し、書庫で保存するとともに、展示や閲覧を通じて広く利用していただいています。

令和元年度から始めた新収集文書を紹介する展示は、昨年度開催できませんでしたので、2年ぶりの開催となります。この間、古文書に限っても、令和3年度だけで4,540点、今年度も多数の寄贈・寄託を受けました。

今回は、当館で2年間に新たに収集した古文書の中から、いくつかを取り上げてご紹介します。この展示を通じて、地域の歴史的な記録資料を収集・保存することの意義をお伝えできればと思います。(担当：西村 晃)



(伝) 平田玉蘊筆「鶏図屏風」



菅原範夫氏収集資料(201203-1227)

平田玉蘊は尾道の木綿問屋の次女として生まれた。父親の平田五峰も池大雅の門人である福原五岳から学んだ画家で、玉蘊は父や福原五岳に画を学び、後には京都で、岡山忠孝の門人である四条派の画家八田古秀からも教えを受けた。父が亡くなると経済的に困窮したが、玉蘊の筆一本で母を支え、日本初の女流職業画家と称されている。

玉蘊は花鳥画を得意とし、鶏を描いた絵も数多く残されている。この鶏の羽を丁寧に描いた繊細で写実的なその筆致からは、伊藤若冲の影響を想わせる。

## 広島県立文書館展示室

広島市中区千田町3丁目7-47  
広島県情報プラザ2F  
TEL082-245-8444  
FAX082-245-4541

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/monjokan/>





雨で白骨となる兵士の亡骸（「ビルマ蟻」挿絵）

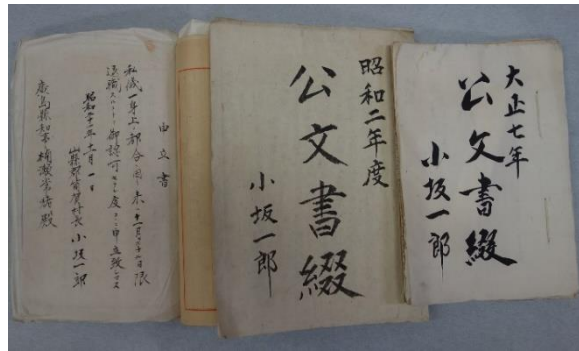


メイミヨウ日本軍墓地（「抑留生活記」挿絵）

### 「ビルマ蟻」・「ビルマ抑留生活記」など 住吉義級文書（202112-1～3）

可部町生まれの住吉義級は、昭和12年（1937）、充員召集により歩兵第十一聯隊に入隊し、軍医（野戦病院要員）として中国大陸を転戦し、昭和15年に帰国した。翌年に再度召集され、作戦に参加したほとんどの日本兵が死亡した「史上最悪の作戦」と言われる「インパール作戦」など、ビルマ（現ミャンマー）を五年半転戦した後に抑留され、昭和22年に帰国した。復員後、義級はあまりにも悲惨であったビルマでの戦争体験を、挿絵入りで「ビルマ蟻」と「ビルマ抑留生活記」としてまとめた。中国に従軍した「陣中日記」は、写真を見て当時を思い出しながら、「支那事変従軍記」としてまとめた。

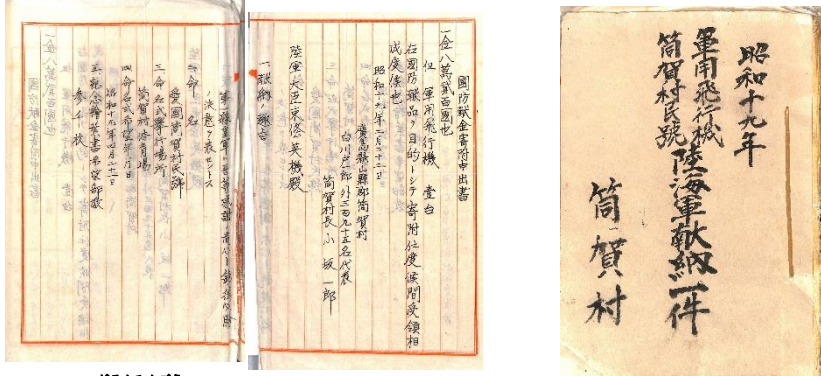
<参考文献：住吉義級（住吉光雄発行）『ビルマ蟻』>



おさか いちろう  
小坂一郎の公文書綴 大正7年(1918)・昭和2年(1927)度・昭和13～21年(1938～46)  
小坂家文書（202106）

明治30年（1897）に山県郡上殿村（山県郡安芸太田町上殿）に生まれた小坂一郎は、大正7年（1918）3月に同村収入役となり、助役を経て昭和13年（1938）10月には村長に当選した（昭和17年10月に離任）。昭和18年5月からは隣村である山県郡筒賀村の村長に当選し、終戦を挟んで昭和21年11月まで在任した。その後、昭和29年7月には上殿村村長に再選され、戸河内町に合併される昭和31年8月まで務め、10月からは戸河内町助役となった。また、この間には上殿村の村会議員や、上殿村社である八幡神社の世話役、山県郡農会議員なども務めていた。

このように上殿村・筒賀村・戸河内町の重職を歴任し、その他の諸役も務めていた小坂一郎のもとには、引継ぎの対象にならない私的な「公文書」が残った。



つつがそんみんごう  
軍用飛行機筒賀村民号陸海軍献納一件 昭和19年(1944) 小坂家文書(202106)

太平洋戦争の戦費は軍事予算から支出されたが、戦争が長期化すると、政府は戦時国債などを発行して軍事費を調達し、軍艦や戦車、航空機などの兵器を生産した。その一方で、陸軍や海軍も一般市民や企業などからの献金によって航空機を調達するようになる。自分たちが寄付をして軍用機が購入されれば誇らしく、宣伝効果があった。こうして献納機を目的とする献金の気運は高まった。献納された軍用機は陸軍では「愛国号」、海軍では「報国号」と名付けられ、通し番号と献納者の名前が機体に書かれた。

山県郡筒賀村は軍用飛行機「愛国筒賀村民号」1機分として海軍へ金81,000円、陸軍へ80,200円、軍用飛行機「山県郡号」の一部として金7,368円、合計168,568円を軍へ献納した。これは現在の金額に直すと約4,900万円余りとなる（日本銀行の企業物価指数で換算）。

### 佐伯巖島・豊嶋家文書（202102）

中世巖島神社官・大工職の系譜を引く豊嶋家は、江戸時代中期以降、従来余技であった能楽で巖島神社に奉仕し、高安流能楽師として浅野藩主に召し抱えられた。幕末維新期の10代豊嶋弥左衛門は「宮島でからすが鳴かない日はあっても豊嶋の家から謡いの声が聞こえぬ日はない」と囁かれるほど、息子の11代一松を稽古したという。明治7年（1874）、この2代は全国に先駆け再開された巖島神社の御神事能番組に名を遺し、その後「桃花祭」と命名され現在に至る。一松（1864～1945）の息子である12代弥左衛門・豊・要之助・十郎・永蔵・文二の6人は全て能楽師となり「豊嶋兄弟」で活躍したが、一松と要之助、永蔵、文二は戦争と原爆に没した。昭和52年（1977）長男12代弥左衛門（1899～1978）は、広島県出身者として初の重要無形文化財に各個認定された（人間国宝）。豊と十郎は重要無形文化財保持者。

明治以降、豊嶋家は巖島と広島を軸に、東京・名古屋・京都・大阪・下関・門司・長崎・島原で能楽（高安流ワキ方、金剛流シテ方）の継承と振興に邁進した。広島では国泰寺町真菰（現中区役所付近）の広島公会堂や、立町の崇徳教社の能舞台、鏡津神社能楽堂などで活躍し、広島市鉄砲町の自宅から機関誌『九曜星』を発行した。現在13代豊嶋弥左衛門（12代の長男）と豊嶋兎嗣（豊の孫）が能楽師（金剛流シテ方）として活躍する重要無形文化財保持者。豊嶋起久子（豊の孫）は中欧6カ国の国立歌劇場公演で成功を収めたオペラ歌手。



豊嶋家族11名の集合写真 広島市鉄砲町自宅にて 昭和11年(1936)  
前列右から豊嶋豊(金剛流シテ方)、弥左衛門(人間国宝)、一松(高安流ワキ方)  
豊嶋家文書（202102-1）



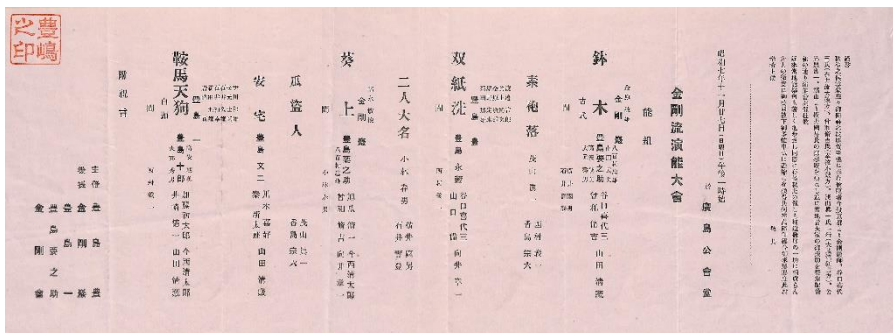
広島公会堂の組立式能舞台における能会上演  
右側前列右から3人目が豊嶋永蔵(高安流ワキ方)  
豊嶋家文書（202102-2）



崇徳教社能楽堂で開催された広島金剛会 豊嶋家文書（202102-44）



崇徳教社能楽堂で開催された広島金剛会 豊嶋家文書（202102-45）



金剛流演能大会案内 於広島公会堂 昭和7年(1932)年11月27日  
豊嶋家文書(202102-5)

広島金剛会で、豊嶋6人兄弟が揃い、京都から金剛流宗家の金剛巖を招待した。



広島方角総図 慶応3年(1867)カ 佐々木勝幸氏収集文書（200611-1100）

広島城下町を12区分し、御用地、寺院、町村家、道筋、堀川、川手堤などを色分けして描いた折本仕立ての絵図。作成年代は記載されていないが、「広島方角総図」の副題を持ち、慶応3年11月29日調査とある『芸藩志』附図其五「藩士邸宅明細図」と同じ系統の絵図と考えられる。

武家屋敷には、その主が代わるたびに藩士名を記した紙が貼り重ねられており、天保6年（1835）に一旦完成し、同じ手法で最終的に慶応3年11月29日に完成した当館寄託・三好家文書「御城下侍屋敷新開之絵図」（201311-11）と酷似している。



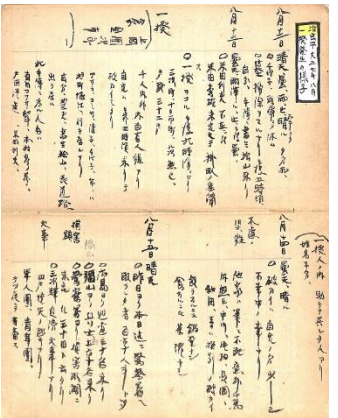
三次町森岡家3代の日記 明治31年～昭和25年(1898～1950)  
森岡家文書（201912-38～83）

三次郡三次町の酒造家であった森岡家では、治郎平・コミサ・清子の3代、53年間にわたる46冊の日記を残した。その大半、約35年間（34.5冊）は森岡家5代目治郎平（1862～1934）の手になる。娘のコミサ（1890～1948）が治郎平の死後に、戦争をはさむ約15年間（11冊）日記を引き継ぎ、さらにその娘である清子（1917～1949）が2年余の短い期間であったが日記をつけた（0.5冊）。

治郎平が日記を書き始めた明治31年頃の森岡家では、酒の醸造と店頭での小売業が順調であったが、激しい販売競争による共倒れを防ぐために10数名の業者の合資により、明治39年に三次酒造株式会社が設立されると、その2年後には酒造業を廃業している。

1日数行程度の記述ではあるが、これらの日記から、大正7年（1918）に発生した米騒動、広島・三次間の芸備鉄道（現芸備線）開通、米軍機の三次襲来など、水害等の三次の災害、神事や仏事、婚礼や年中行事などの三次の風俗などをうかがい知ることができる。

<参考文献：森岡晋『三次町 森岡家三代日記』>



（大正七年）  
八月十三日  
〇一揆ヲコル、午後九時頃ヨリ  
三次町、十日市町、八次、熊巳、  
戸数三十二戸  
千人内外内百有人組アリ  
自宅八午前四時頃来リテ  
破カイシタリ